

て金倉先生の学恩に感謝の誠を捧げ、厳密な文献考証や思索の御指導を継承し展開することを誓わねばならない。

いまここに生前の御恩に深謝し、謹んで先生の御冥福をお祈り申し上げる次第である。

昭和六十二年三月十日

立正大学長

渡辺宝陽

金倉圓照先生を偲ぶ

巨星落つ。金倉先生の遷化は確かに一つの時代の終わりを画したと感じさせる。金倉先生は日本のインド学仏教学の分野において近代的研究手法の草創から確立のために尽力し活躍された世界的に屈指の研究者であった。その金倉先生が昭和六十二年一月二十四日早朝に遷化された。

立正大学の主流は日蓮学にあるが、それを支える仏教学研究にも二つの主要な流れがあった。一つは漢文資料を駆使する中国仏教を中心とした研究分野であり、もう一つはインドのサンスクリット語などを始めとした原典研究の分野である。前者の分野では布施浩岳先生、坂本幸男先生がおられたが、後者の分野は東北大学を退官された金倉先生が立正大学に赴任されて一段と盛んとなり、多くの後進が育成された。

立正大学には日蓮教学研究所と法華経文化研究所の二つの研究所があり、法華経文化研究所は坂本幸男先生が草創の所長である。その坂本幸男先生は仏教学部長・立正大学長等の要職を歴任されたが、その坂本先生をいつも陰から支え、適切な助言者の役割を果たしておられたのも金倉先生であった。

坂本・金倉の両先生は名コンビであった。が、この二人はもういない。今、金倉先生の遷化に際し、坂本・金倉両先生の友情の逸話の幾つかを思い出し、

金倉先生への哀悼の意を表したい。

東北大学を定年退官された金倉先生を立正大学仏教学部教授として迎えたのは、昭和三十五年四月であった。ところが昭和四十一年に宮城教育大学が新設されるにあたり、金倉先生は請われて初代学長に赴任されることになった。仏教学部教授会は金倉先生を割愛するには余りに忍び難いことであったが、坂本先生が「宮城教育大学でのお役目が終わったならば必ずこの立正大学にもどってきて欲しい」と懇願すると、金倉先生は「しばらく出掛けます」と申され、坂本先生はもとより教授会一同も安堵したものであった。そして昭和四十四年春、金倉先生は再び立正大学に帰られた。

昭和四十三年、坂本先生が立正大学学長になられた。その翌年四月の教授会後の懇話会で坂本先生が「金倉先生は宮城教育大学の初代学長であられたが、学長として一番心掛けなければならないことは何でしょう」と、金倉先生に話し掛けられた。するとすかさず金倉先生は「それは必要なときにははつきりとノーということですよ」と言い切られた。このときのお二人の会話を近くで聞いていて、私は金倉先生の毅然とした言葉に感動したものである。

何時のことであったか、仏教学部の教員が湯河原に出掛けて懇親会の宴を張ったことがあった。このとき何人かの先生がスピーチを行なった。金倉先生も立たれて、それまでの研究生生活を回顧され、「ようやく法華経を最後まで読み終えたが、十年かかりました。」と申されたのに続けて、生涯何を為し得ることが出来たかと顧みると、大して何も出来なかったと思う、というような意味のことを申された。この先生の言葉を耳にしたとき私は大いに驚いた。金倉先生ほど多くの厳密な著書を著わし、学界に貢献し、多数の後進を育まれた学者は希であると私は強く信じているからである。先生のこうした言葉をきき、私は益々金倉先生に対する畏敬の念を強くしたのである。

昭和六十二年三月十日

法華経文化研究所長

野村耀昌